

不登校と向き合う人たちのために

ほっとLine

■今回のテーマ
不登校とICT教育

2021
秋号
vol.51

ほっとLine



学校法人 開桜学院 ひびき 日々輝学園高等学校 | 広域通信制 | 単位制 | 普通科 |

生徒と向き合うICT

理事長・学校長 **小椋 龍郎**

週5日登校スタイルの本校では、Face to Faceを大切にしながら、ICT教育を積極的に進めています。元来、情報通信技術を活用してきた通信制課程の高校なので、先生たちは違和感なく取り組めていると感じています。

授業や学習の広がり、方法・教材の共有化や評価の適時化、そして情報活用能力の育成など、大きなメリットがあると思います。しかし一方で、学習が目的的でシステムティックになり過ぎないか、教師と生徒のやり取りはどのようになるのか、学びの余白が少なくなり想像することが乏しくならないかなど、古い世代の教師には心配なことが浮かんでまいります。

本校のICT教育も相応のコンテンツに分かれますが、そのひとつとして、本校入学後に長期欠席状態になった生徒への指導・支援があります。これまで、そのような生徒に対しては、電話やレターカウンセリングあるいは家庭訪問などが主な支援方法でした。特に家庭訪問は、本人と顔を合わせてじっくり話を聞いたり、話しやすい環境で保護者の方と意見交換したりすることで、関係性がよくなり、生徒の気持ちが上向きになることが多くありました。長欠生徒の大きな心配事である学習面の指導を行えるようになりますと、再登校に随分と近づきます。

ところが、高校での家庭訪問では生徒宅までの距離の長さというハードルがあり、思うように継続的な支援に取り組めなかったケースも少なくありませんでした。

この大きな課題に対して、近年本校では、オンラインでの面談や学習指導が有効な代替方法になると考え実践しています。容易に接続できることから、クラス担任との面談に応じてくれる生徒が多くなりました。オンライン上ならクラスの授業に入れる、自分の意見も言えるという生徒も出現しています。また、この利便性は、教科担任の適宜の個別指導やカウンセラーのカウンセリングをより現実的なものにしてくれました。

目先の効果に一喜一憂せず、しっかりとねらいと観点を押さえ、評価を行い、デメリットも考えながら、ICTによる不登校生徒への指導・支援を進めていきたいと考えています。

C O N T E N T S

生徒と向き合うICT	1
理事長・学校長 小椋 龍郎	
ICT教育の推進と	
Google Workspace for Educationの導入	2
本校 オンラインコース教頭 名木 宏彰	
ICTを利用したクラス運営と不登校支援	4
横浜校 教員 戒田 大樹	
Google Meetを活用して個々に応じた支援を	6
宇都宮キャンパス 教務副主任 飯島 幸次	
生徒との関係性構築に活かすICT	8
さいたまキャンパス 教員 辻本 陽香	
感動的なオンライン授業!?	10
神奈川校 カウンセラー(公認心理師・臨床心理士) 大田 隆人	
“Face to Face”のICT教育	12
東京校 教員 小峰 竜太	

生徒・保護者の方を対象に、学校説明会やオープンキャンパスを実施しています。
また、個別の学校見学、相談も随時受付けております。
各校舎までお気軽にお問合せください。

【本校】TEL 0287(41) 3851

【東京校】TEL 04(2965) 9800

【宇都宮キャンパス】TEL 028(614) 3866

【神奈川校】TEL 0467(77) 8288

【さいたまキャンパス】TEL 048(650) 0377

【横浜校】TEL 045(945) 3778

【日々輝学園高等学校ホームページ】<https://www.hibiki-gakuen.ed.jp>

『ほっとLine』のバックナンバーをダウンロード・閲覧いただけます。

ICT教育の推進と Google Workspace for Educationの導入

本校 オンラインコース教頭 名木 宏彰

日々輝学園では、これまでICT教育の推進に力を入れてきました。前身の武蔵国際総合学園の時代から、パソコンを導入し商業系の科目や検定に挑戦しました。平成27年には全校舎にiPadを配置し、併せて校舎内のWi-Fi整備も行いました。また、校内外の研修や会議を通して教職員の意識向上とともに、創立15年目にはChromebook(クロームブック)を導入しました。

現在では各校舎ともWindowsPC、

●導入したChromebookを利用した授業風景



Chromebook、iPadを生徒用、教職員用に配備し、Google Workspace for Educationを中心に活用しています。

機材やインターネット環境の整備を進める一方で、どのようなサービス(ソフト)を導入すべきかについても検討しました。今後教員や生徒の負担やリスクの少なく管理のしやすいもの、機種やOSに依存しないクラウド型のもの、教育で使用するのに特化しているもの、多くのサービスが提供されているものとして、G Suite for Education(現:Google Workspace for Education)を導入しました。

Google Workspace for Education(以下GWE)では、コアサービスだけで14種類、その他のサービスを含めると50以上のサービスがあり、一度にすべてを行うのは難しいと考え、最もコアなサービスであ

るClassroomから導入することとしました。幸いなことに先行する事例がいくつもあり、活用ガイドや動画も無償で数多く提供されているため、これらを活用して教職員への研修を行いました。

また生徒に対しては、日々輝学園独自の動画の作成やマニュアルを作成することで生徒にわかりやすくできるように行いました。併せて対面での丁寧な指導と電話による対応も行い、ログインや使用時におけるトラブルに対応するとともに、それらの対応事例を集約することで、トラブルなどに対応できる教職員を増やしていくことができました。

教職員、生徒とともに共通することですが、最初は不安や苦しさがあったと思います。しかし使い始めること、そして継続的に使い続けることでGWEが根付いていくことができたと思います。

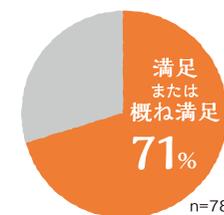
●YouTubeでの動画マニュアル配信の例



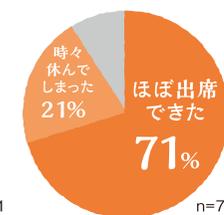
日々輝学園ではこれまでリアルさや体験を含めたFace to Faceの教育を大切にやってきましたが、これからは「リアルさや体験を含めたFace to Faceを大切にしながら、ICT教育を積極的に展開する教育」を行っていき、生徒たちには、パソコンなどを活用するための知識・技能の習得、多くの情報から適正な情報を判断し活用していく力、情報社会の中で発信していく力を着けさせたいと思います。

そのために今後もGWEで提供されるサービスを大いに活用し、情報発信や課題配布、生徒同士の協同作業などに取り組んでいきたいと思っています。

●令和2年度末に実施した生徒アンケート結果より



オンライン授業への感想



オンライン授業への出席



ICTを利用したクラス運営と不登校支援

横浜校 教員 戒田 大樹

私は昨年度、1年生のSTクラスを担当していました。このクラスでは、主にClassroomとFormsを活用していました。Classroomでは、ホームルームや授業科目ごとにクラスを作成することができ、生徒に対して連絡事項や課題の設定などを行うことができます。ストリームという機能を利用して連絡事項や学級通信、オンライン授業の実施後に、その時利用した資料やノートデータを投稿することで、欠席した生徒や聞き逃してしまった生徒にも情報を共有することができました。

また、Classroomでは個別の生徒への声掛けにも活用できます。ストリームでは、メッセージを個別に送信したり、生徒と教員だけが見ることのできる限定公開コメントを利用してやり取りをすることができます。昨年度、私のクラスの生徒で自分の気持ちを

なかなか表現することができなかった生徒がいました。最初はこの機能を使って、悩みやSOSなどを気持ちが不安定になった時に書き込んで教えてくれました。話を聞いていくうちに少しずつ対面でも話をしてくれるようになり、今年度は1学期末現在まで安定して登校することができています。この



ようになかなか面と向かって話をするのが難しい生徒でも、コメントならば書き込むことができるなど、気持ちの表現の場や最初のきっかけとして利用することができる側面もあるようでした。

Formsでは、アンケートや小テストを作成することができます。授業においてはFormsで小テストを作成するとオンライン授業中にすぐに授業の理解度をチェックすることができます。また、アンケートを作成することでさまざまな意見を集約することができます。クラスでは席替えのアンケート、文化祭のクラスの出し物を決める、クラスTシャツの案を募集するなど、生徒からの意見を集める機会がたくさんあります。これまでは当日休んでしまうとそのアンケートに参加できなかったり、後日登校した際に答えてもらったりしていました。しかしFormsを使うことで、クラス全員に同じタイミングで聞き取ることができました。そうすることでなかなか出席できない状態が続いていた生徒も自分の意見を言うことができたり、今クラスでどういう話し合いが進んでいるのかを知ることができ、次に登校したとき、戸惑うことが減ったのではないかと考えています。また、教室ではなかなか意見を言うことがで

きない生徒でも、Formsでアンケートを取ること、自宅でも回答することができるため、普段よりも積極的に意見を出すことができたと考えます。

今年度は昨年度活用した機能でのサポートを継続していくとともに、Forms機能を利用して生徒たちのポートフォリオを蓄積することもめざしていきたいと考えています。また家庭訪問が難しい場合にはオンラインでの面談をすることも模索していきます。

教員の業務のICT化も同時に進めています。例えば今までアナログで時間を掛けていたものをICTにより効率化していき、教員の時間にゆとりを生むことでこれまでに以上に個別での生徒対応や、家庭訪問などの対応を実施していけるのではないかと思います。

ICTは今後、不登校支援という面でも多くの可能性を持っているものだと考えています。しかし、新しい取り組みが多いため、教員・生徒ともにその機能に慣れていかなければなりません。また、権限やセキュリティ面での課題もあると考えます。そのため、今後も安全に、そして便利に利用できる機能を選別して利用していく必要があると思います。

Google Meetを活用して 個々に応じた支援を

宇都宮キャンパス 教務副主任 飯島 幸次

Google Workspaceのアプリケーションに、ビデオチャットアプリの「Google Meet (以下Meet)」があります。Meetは、最大で100ユーザが参加できるビデオチャットアプリです。学校内のユーザと1対1やグループで簡単にビデオチャットを行うことができます。また、MeetはPCブラウザ、PCアプリ、スマートフォン、タブレットから利用できるため、いつでもどこからでもビデオ会議に参加できます。標準的な機能として、ビデオ通話・音声通話・チャット・画面共有・ホワイトボード(Jamboard)・会議の録画などがあります。

オンライン授業では、画面共有やホワイトボードが有効だと感じています。教科書や資料・動画を画面共有することができますので、角度や視力で黒板が見えにくい生徒への学習フォローにもなると考えてい

ます。また、ホワイトボードを活用し、言葉や文字では伝えづらいことを状況に合わせてわかりやすく伝えることができます。生徒に編集権限をつければ、ホワイトボードの編集が可能ですので、それぞれが同時に書き込みや共有を行うことで、オンライン上で実現しにくいとされていた相互の意見交換や共有が可能となります。これからも、より生徒にとってわかりやすく充実した授業になるように授業研究を進めていきたいと思います。

Meetの機能を活用して授業を行うほか、面談や個別指導も行っています。

例えばAさんは、学校に行く気持ちはあるのですが、登校までにひとつひとつ手順を踏まなければ登校できず、なかなか学校で授業を受けることができませんでした。しかし、2週に1回行っているオンライン授



業では、登校するための手順が省略されるので、一度も休むことなく参加することができました。オンライン授業でクラスに参加しているという所属感を持ちつつ、放課後などに登校してもらい、担任との関係づくりを進めました。

また、本校の特徴として、広域通信制であるため、遠方(片道60分超)から通っている生徒も在籍しています。距離と時間の理由から、思うように家庭訪問を実施できないケースもあります。初期に生徒との信頼関係を築くにあたり、顔が見えるか見えないかは大きな違いがありますが、Meetの活用により、画面越しでも顔を合わせながら話ができるようになりました。電話だけのコミュニケーションよりも、信頼関係を築きやすいと感じています。

学習面での活用場面は今後さらに進む

でしょう。たとえば、Bくんは、遠距離に住んでいるのですが、なかなか登校することができませんでした。さらに、学習を自分で進めることが難しく、レポートへの取り組みなどが遅れがちでした。遠距離ということもあり、こまめに家庭訪問を行って学習のフォローをすることも数多くはできませんでしたが、リモートで接続し、一緒にレポートなどに取り組み単位を修得することができました。外国籍のCくんも国籍の関係で一時帰国した際、現在のコロナ禍で身動きが取れない時期がありました。この時も担任とオンラインで面談したり、学習指導を行ったりすることができました。どちらのケースも、今までなら電話での連絡や頻度の低い家庭訪問で対応しており、場合によっては単位修得に至らなかったかもしれません。

今後も、生徒一人ひとりの「よさ」を伸ばせるよう、Meetの活用法をよりブラッシュアップしていき、生徒の指導・援助を続けていきたいと思っています。そのためには教員間の情報共有が重要です。教員間でMeetを使いながら、教員側も使い方に慣れていき、生徒に還元できるように取り組んでいます。

生徒との関係性構築に 活かすICT

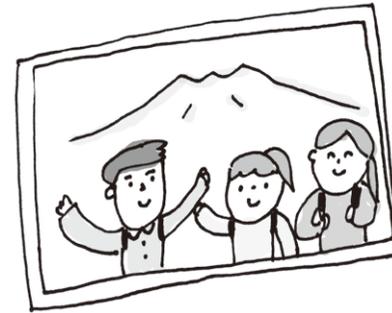
さいたまキャンパス 教員 辻本 陽香

私たちの使用するGoogle機能のひとつに、Google Chat(以下Chat)というものがあります。Chatとは、テキストチャットツールで、身近なもので例えるとLINEのようにテキストでのやりとりができるものです。利点としては、メッセージでのやりとりなので、いつでもどこでも送受信ができ、リモートワーク中でも対応できることが挙げられます。また、個別でのやりとりになるので、気軽にメッセージを送ることができます。現在は教員同士での利用が基本ですが、今後は、対生徒での活用もできるのではないかと考えられます。

Chatの他にも、ICTのさまざまな機能を利用して生徒との関係性構築を図っています。なかなか思うように登校ができないという生徒とは、ビデオ通話やコメント機能などを通じて定期的にコミュニケー

ションをとるように試みています。自宅という安心できる環境でコミュニケーションをとれるので、時間や回数をじっくりかけて関係性を構築していくことができます。

ICTを活用するにあたっては、ただの一方的な連絡手段とならないように、さまざまな工夫を凝らしてコミュニケーションをとっています。例えば、ビデオ通話では、教員の自己紹介をしたり、校舎内を回って紹介したりしています。自宅にいながらも、教室にいる感覚を体験してもらえるので、登



校しやすくなることを目的としています。コメント機能では、週に3回程度、曜日替わりでテーマを決めて、簡単な雑学を紹介したり、なぞなぞを出したりしているケースもあります。コミュニケーションを目的としているので、もちろん、調べたり家族に相談したりして大丈夫です。定期的やりとりをしていく中で、生徒を知り、好きなことや、話しやすい話題を探っています。

また、こちらから情報を発信するだけでなく、趣味の話や近況などを聞き、双方向でのコミュニケーションになるように意識しています。電話やビデオ通話だとなかなか話づらいという生徒も、文字によるやりとりであれば、好きなときに確認や返信ができるので、ハードルが下がるという場合があります。また、一緒にオンラインゲームをすることもあります。ビデオ通話をつなぎながらの対戦ですので、対

面で行うのと同じくらい白熱します。実際に顔を合わせることができなくても、一緒に楽しんで盛り上がることのできるツールがあるというのは、ICTだからこそそのメリットだと思っています。

いずれも、「次の登校につながるため」の取り組みを意識しています。例えば、生徒が好きな写真を撮ったという話が出たら、「登校したときに見せて」と伝えたり、「今度登校したときには、対面でゲームをしよう」と伝えたりして、次の登校に向けての楽しみや目的をつくっています。自宅にいてリラックスした状態でやりとりを行い、「この先生となら会えそう、会ってみたい」という信頼関係を構築することを目的としています。今後も、ICTを活用しながら信頼関係を構築し、日々輝学園が重視している対面でのやりとりにつなげていきたいと考えています。



感動的なオンライン授業!?

神奈川校 カウンセラー(公認心理師・臨床心理士) 大田 隆人

「ホントに感動しました! もう全部オンライン授業になればいいのに…」

臨時休校明けの昨年6月、久しぶりの対面談で、当時2年生だったAさんが、オンライン授業の様子を興奮気味に語ってくれました。

Aさんは小中学校時代、友だち関係で嫌な思いをしました。その心の傷が今でも残り、生徒がたくさんいる場所には怖くて行けません。1年生の時、電車に乗るのも怖いので、夕方母親に車で送ってもらって登校し、担任と学習を進めていました。



近年、インターネットで学習を進める通信制高校が増えてきましたが、どうしてAさんはそういった学校に入学しなかったのでしょうか?

Aさんは、2年生の授業が始まると何とかがんばって授業に出席しようとしていました。しかし教室には見知らぬ生徒ばかり。教室で目立つ動きをしてしまうと「クラスメイトからどう思われるか」ということが気になって仕方ありません。そのため、休み時間にトイレに行くことさえ我慢してしまい、とにかく目立たないように教室で過ごしていました。こうした緊張状態の中で学校生活を送っていたため、秋頃から教室に行けなくなり、再び別室登校が続きました。

2年生最後の面談で3年生の始業式に参加するかどうかについて話をしました。Aさんの結論としては「その頃にどのような

状況になっているかわからないので、その日は夕方に登校します」となり、私も妥当な判断だと支持しました。無理をして心の傷を広げてしまうよりは、安心感を確かめながら自信をつけていってほしいと思ったからです。

始業式の前日、母親から電話がありました。「春休み中に子どもと話をし『将来のためにも高校在学中に人に慣れていった方がいい』という気持ちを創ることができたので、明日の始業式は朝から教室に行かせます」という内容でした。

オンライン授業を大絶賛するAさんがネットで学習を進める高校を選ばず、同級生への恐怖心を抱えながらも、わざわざ全日制スタイルの高校を選んだ理由はまさにここです。Aさんのように将来のために「人に慣れたい」と思っている生徒にとって、教師やクラスメイトとのFace to Faceのふれあいは、勇気を出して次のステージに進むためには必要不可欠なのです。

これまで学校に行きたくても行くことができない生徒は、授業を受けられないことで学習が遅れ、さらに不安が大きくなるといった悪循環に陥りがちでした。しかし、現在は周囲を気にせず学習に取り組める



「オンライン授業」や個別最適化されたICT教材の「すらら」が導入され、不登校の生徒たちがしっかり学習に取り組めるようになりました。今までほとんど教室に入っていない生徒がオンライン授業には無欠席で取り組むなど、予想以上の効果が表れています。

今後は授業のオンデマンド配信も予定されています。ICT活用により、学習をする場所や時間など、生徒たちのさまざまなニーズに応えることが可能になります。つまり「授業ダイバーシティー」です。授業への参加は教室に限定されず、多様性に柔軟な対応が可能となります。授業に参加することで学習への不安が軽減し、再び登校できるようになる効果を期待しています。

「ICT教育」と「Face to Face」、この両輪のベストミックスが不登校生徒の可能性を大きく広げていきそうです。

“Face to Face”のICT教育

東京校 教員 小峰 竜太

私は日々輝学園が大切にしている“Face to face”の理念がとても好きです。世の中がどれだけデジタル化をしても、人間がその世界だけで有意義な生活を送るという未来は、しばらく訪れることはないと思っています。人との関わりの中で生きる力を身に付けることは重要です。中学校までは不登校だった生徒も心機一転、高校生になったら毎日学校に行けるように努力しよう、という強い意志を持って日々輝学園に入学してくる生徒は少なくありません。不登校の原因の多くは人間関係の問題や学習不安です。高校では友人をつくりたいという思いや、もう一度学び直しをしたいという思いを抱いて入学してきます。しかし、思うようにいかず、再び休みがちになるというケースもあります。現在、日々輝学園では積極的にICT機器を活用しようと

しており、不登校支援という観点から見てもとても有効な手段であると思っています。

人が新しい環境に身を置いた場合、すぐにその環境に適應できることは稀だと思います。成果を急ぎすぎて、一度自分の殻を破ろうとしたものの、それが叶わなかった時「やはり自分はダメなんだ」と努力をやめてしまうことがあります。今まで担任は、



そういった生徒に対して電話連絡で放課後の登校を促したり、可能であれば家庭訪問を試みるなどの対応をしてきました。電話連絡が苦手な生徒とは話をすることができないことも多く、家庭訪問では本人と会えないこともありました。対面して話ができれば少しずつでも前向きな気持ちにできると思いながらも、なかなか生徒とのコミュニケーションの場が持てないという葛藤に苛まれたこともありました。

しかし、ICTを利用すると今まで全く連絡を取ることができなかった生徒とやりとりをすることができ、生徒に学校とのつながりや教員とのつながりを意識させることができるようになりました。また、登校はできても場面緘黙を持ち、教員と対面してコミュニケーションを取ることが難しい生徒もいます。適切なサポートができなければ、場合によっては不登校になってしまう可能性も考えられるケースですが、そういった生徒ともGoogle Chatなどを通してコミュニケーションを取ることができるとは、非常によい側面であると感じています。

学習不安の解消という側面においてもICT機器は効果を発揮します。普段登校ができなくても学ぶ意欲を持っている生徒



は多く、オンライン授業には出席ができたり、「すらら」の課題が配信されればしっかりと取り組むことができる生徒は多くいます。また、担任の日々の連絡ツールとして使用することによって、現在クラスでどのようなことが起こっているのかを生徒が把握でき、久しぶりに登校した際の緊張感を和らげる働きも持っています。

ICT機器の利用はコミュニケーションツール、学習支援のツールとして今後も重要な役割を担うと思っています。上手に利用することができれば不登校から学校に復帰するまでのひとつのステップとして、今後欠かすことができない存在になると私は考えています。学校や教員とのつながりを持ち、最終的には学校に登校し、教員や友人たちと生活を共にすることができるようになるよう、全力でサポートしたいと考えています。